記録でたどる浅間山噴火略年表（天明三年まで）

年	被害状況	出典
白鳳一三年（六八五） （飛鳥時代）	信濃国に灰が降り草木が枯れた。 ※浅間山の噴火だと解釈されたことがあるが、風向きを考えるとおかしい。長野県西方の火山、たとえば焼岳の噴火ではないかとされる。	『日本書紀』天武天皇十四年三月
天仁元年（一一〇八） （平安時代）	浅間山が噴火して上野国に砂礫が降り、田畑に大きな被害があった。八月十八日と二十日の鳴動は京都まで聞こえた。そのあと京都で早朝、東方の空が甚だしく赤く見えた。 ※規模（噴出量）は過去一万年の浅間山噴火のなかで最大だったとされる。なおこの天仁元年の浅間山噴火被害にともなう再開発において、上野国内では新田荘をはじめとする多くの荘園が形成されていく。	『中右記』天仁元年八月
弘安四年（一二八一） （鎌倉時代）	六月九日に浅間山が噴火して、追分小諸に灰が降り、石とまりまで押出しがあった。 ※出典史料が書かれたのは噴火から五〇〇年以上経過した江戸時代である。同時代史料はみつかっていない。該当する堆積物も知られていない。	『浅間焼出山津波大変記』 『古史伝』
享禄四年（一五三一） （室町時代）	十一月二十二日大雪のあと、二十七日に浅間山が噴火して泥流が発生し、多数の村が流された。街道を修復するのに四年かかった。 ※出典史料が書かれたのは噴火から二五〇年以上経過した江戸時代である。同時代史料はみつかっていない。	『天明信上変異記』
慶長元年（一五九六） （織豊時代）	畿内関東諸国に毛が降った。大石が降り死者が多数出た。	『小槻孝亮宿禰記』慶長元年六月 『天明信上変異記』
天明三年（一七八三）	四月九日、天明の大爆発がはじまり、灰が降る。 七月八日、大噴火、 十時ころ大爆音とともに浅間山山頂は一大火柱を上げて天に昇ること数百丈、その火柱は北に倒れて火焔の滝となり、またたくまに鎌原を埋めつくす。火砕流が吾妻川に流れ込み、川の水と火砕物が一つとなった巨大な泥流が一気に吾妻川を押し下り、沿岸の耕地や村落を埋めつくす。正午ごろには利根川に合流した泥流が前橋付近に到達する。	『浅間大変覚書』ほか

【参考文献】
・古代中世地震史料研究会「「古代・中世」地震・噴火史料データベース」
・西垣晴次・山本隆志・丑木幸男編『群馬県の歴史』（山川出版社、一九九七年）